

保健管理センターにおける研究の推移

齊藤 郁夫*

保健管理センターの業務の一領域として研究がある。各教職員は専門領域の学会等において発表するとともに、全国大学保健管理研究集会や内科学会総会において発表している。今回は、1972年の保健管理センター発足以来の全国大学保健管理研究集会や内科学会総会の一般演題における発表および英文論文の発表状況について検討した。

対象と方法

1992年に発刊された慶應保健1991¹⁾、1995年に発刊された慶應義塾大学保健管理センター年報1992～1994²⁾ およびそれ以後の慶應義塾大学保健管理センター年報から、1972年以後の全国大学保健管理研究集会、内科学会総会の一般演題の発表、英文論文を抽出した。主たる研究領域を大きく、代謝、感染症、循環器、消化器、呼吸器、健診、生活習慣、精神科、その他に分け、また、年代を1972年から1994年までと1995年以後に分けて検討した。研究発表の対象のほとんどは、慶應義塾の高校生以上の学生および教職員であった。

成 績

1. 全国大学保健管理研究集会における発表

1978年以後56の研究発表が行われた(表1)。1994年までに14、1995年以後42の研究発表が行

われた。2005年以後の最近3年間は15と研究発表が多くなっていた。研究領域として、代謝、感染症、循環器が多かった(図1)。さらに、保健管理センター特有の領域として健診、生活習慣関連の研究発表も1995年以後増加していた。

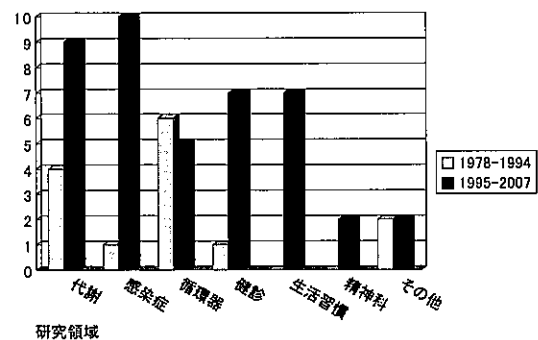


図1 全国大学保健管理研究集会における研究発表の領域と推移

2. 内科学会総会の一般演題における発表

1990年以後、毎年1つの計18の研究発表が行われた(表2)。研究領域としては、代謝10、感染症5、循環器3に分布していた。

3. 英文論文

1981年以後235の英文論文が発表された(図2)。1994年までに47、1995年以後188の論文数であり、主な研究領域として、循環器が71、代謝が60、消化器が31、精神科が22、呼吸器が20であった。実験論文は121、臨床論文は114であった。

* 慶應義塾大学保健管理センター

表1 全国大学保健管理研究集会における発表

年	場 所	領 域	演 題 (要約)
1978	筑波	健 診	保健管理と情報処理
1984	神 戸	循 環 器	若年高血圧者の血行動態
1987	長 崎	循 環 器	スポーツ選手の不整脈
1988	京 都	循 環 器	スポーツ選手の心臓の形態と機能
1989	札 幌	循 環 器	大学生における24時間血圧測定
1990	東 京	そ の 他	運動部員に対する極低温療法
1991	広 島	循 環 器	若年高血圧者の24時間血圧と健診血圧の関係
1992	大 阪	代 謝 消 化 器	肥満高血圧の高インスリン血症 教職員成人病健診でのペプシノーゲン測定
1993	名古屋	代 謝 代 謝	脂肪肝と動脈硬化危険因子の関連 肥満学生の在学中の体重変化
1994	松 本	代 謝	理工学生の体重変化と脂質・体脂肪の変化
1995	秋 田	循 環 器 健 診	医療環境外での血圧測定—白衣現象の長期観察 健診システムの構築
1996	京 都	健 診 代 謝 健 診	教職員の健診受診率 体脂肪測定と女性のライフスタイル変化 学生の健康診断証明書における異常記載と就職への影響
1997	鹿児島	生活習慣 感 染 症 代 謝 健 診	理工教職員のライフスタイル 医療関係者の結核予防対策 体脂肪とライフスタイルの関連 健診システムの開発
1998	横 浜	精 神 代 謝 感 染 症 循 環 器	理系学生のパーソナリティとライフスタイル 骨粗鬆症検査とライフスタイル変化 学園祭における衛生 大学における高血圧をめぐって (シンポジウム)
1999	札 幌	健 診 健 診 代 謝	遺伝子検査におけるインフォームドコンセントと反応 健診システム、OCR の導入 理系高学年学生の生活習慣と脂質
2000	神 戸	健 診 循 環 器 生活習慣	学生の健康、健康診断に関する意識調査 大学における心臓検診—新入生の心電図検査 夜間残留を行う学生に対する健康意識調査
2001	松 山	感 染 症 生活習慣 生活習慣	文化祭の模擬店衛生 教職員のライフスタイル調査 浪人経験学生の健康
2002	東 京	感 染 症 生活習慣	医学部生へのHB ワクチンの意義 大学生ライフスタイルの経時的変化
2003	金 沢	そ の 他 そ の 他 循 環 器	SFC における保健管理センターの認知度 月経痛とライフスタイル、対処能力 血圧測定から生活習慣病予防への展開 (シンポジウム)
2004	大 阪	代 謝 感 染 症	メタボリックシンドロームプログラム 結核接触者健診と QFT
2005	山 形	感 染 症 精 神 代 謝 代 謝 感 染 症	結核集団感染における予防内服 支援 大学生のストレスの現状と対処方法 骨粗鬆症予防プログラム 平均赤血球容積とメタボリックシンドローム、喫煙の関連 ツベルクリン反応と QFT の比較
2006	東 京	生活習慣 生活習慣 循 環 器 感 染 症 代 謝 代 謝	大学生のパソコン使用状況とライフスタイル キャンパス内分煙と喫煙率の推移 BNP 濃度測定の教職員定期健康診断への活用 QFT を用いた結核定期外健康診断—2年間の観察期間を終了して— 大学教職員に対する高脂血症予防プログラムの長期効果 女性教職員を対象とした骨粗鬆症予防プログラムの評価 (第2報)
2007	大 分	感 染 症 感 染 症 循 環 器 感 染 症	小・中・高・大学生の麻疹抗体保有率 (2002—2006年) 入学、雇入れ前免疫状態確認の必要性—自己管理指導とキャンパス内感染対策を考える キャンパス内における BLS 教育の実施とその効果 関東地方の大学における麻疹の流行 (特別講演)

表 2 内科学会総会の一般演題における発表

年 度	領 域	演 題
1990	代 謝	若年女子健常者における血中抗甲状腺抗体および甲状腺ホルモンに関する研究
1991	循 環 器	白衣性高血圧の病態
1992	代 謝	若年の肥満高血圧におけるインスリン抵抗性
1993	代 謝	高校生における高脂血症のスクリーニング
1994	代 謝	腹部エコーにおける脂肪肝と動脈硬化危険因子との関連
1995	代 謝	成人男性の血清脂質におよぼすライフスタイルの影響
1996	代 謝	男子高校生における糖代謝異常の早期発見—50 g 経口糖負荷試験 (GTT) による検討
1997	循 環 器	成人男性における高血圧発症予測因子
1998	感 染 症	B 型肝炎ワクチン接種後の経過に関する研究
1999	感 染 症	医療関係者の結核予防対策—ツベルクリン反応検査と事後管理について
2000	代 謝	血清中 GGTP 活性とインスリン値およびインスリン抵抗性との関連—特に脂肪肝患者における検討
2001	代 謝	高校生の血清コレステロール値と高コレステロール血症に対する生活習慣指導の効果
2002	循 環 器	インスリン抵抗性と高血圧：日本人男性における 7 年間の追跡調査
2003	感 染 症	肺抗酸菌症の血清診断の有用性について
2004	代 謝	女子高校生における甲状腺検診の意義—頸部触診と抗甲状腺抗体による検診と甲状腺疾患の頻度
2005	感 染 症	結核接触者検診における QuantiFERON-TB 検査の効果
2006	感 染 症	医療関係者の結核予防対策において QuantiFERON-TB 検査と費用対効果に優れるか
2007	代 謝	メタボリック症候群 (MS) と肝臓病

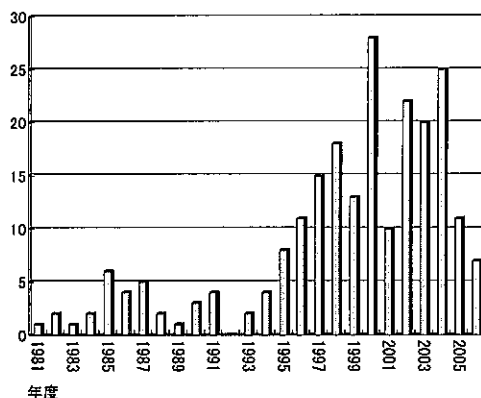


図 2 保健管理センターの教職員による英文論文数

考 察

1994年以後、保健管理センターの業務に関する報告を、研究報告のための慶應保健研究と健診等の成績を掲載するための慶應義塾大学保健管理センター年報の2つに分け、保健管理センターにおける研究の位置づけを明確にした。丁度その時期と一致して、全国大学保健管理研究集会における発表、英文論文が増加した。

研究領域として循環器、代謝が最も多かった。その要因として高血圧、肥満、インスリン抵抗性、糖尿病、高脂血症、骨粗しょう症などは学生、教職員ともに頻度が高く、また、この領域を研究している教員（医師）が多くなったことも考えられた。2004年の1月に起こった結核の集団感染や2007年春の麻疹の流行により、感染症関連の全国大学保健管理研究集会における発表が増加していた。

総 括

1. 1972年の保健管理センター発足以後、2007年までの全国大学保健管理研究集会や内科学会総会の一般演題における発表、英文論文についてまとめた。
2. 全国大学保健管理研究集会では56、内科学会総会の一般演題では18の発表が行われ、英文論文は235であった。
3. 研究領域として、代謝、循環器が多かった。
4. 保健管理センターにおける研究の位置づけを明確にした1994年以後、全国大学保健管理研究集会における発表、英文論文が増加した。

文 献

- 1) 慶應義塾大学保健管理センター：業績ならびに20周年記念関連記事. 慶應保健1991: 10: 65-78, 1992
- 2) 慶應義塾大学保健管理センター：1993年度および1994年度保健管理センター業績. 慶應義塾大学保健管理センター年報1992～1994, 1995